

天下分け目の地漫步～

行程（徒歩約4km）

近鉄若江岩田駅→飯嶋三郎右衛門墓→長沢辻地蔵→山口重信墓→木村重成墓→（河内街道、十三街道）→若江鏡神社→蓮城寺・木村重成公霊牌所→若江城跡碑→若江岩田駅

《大阪電気鉄道》

今の近鉄奈良線は、大正3年（1914）4月上本町～奈良間30.6kmが開通している。若江岩田の駅も若江停留場として誕生。大阪市内から木村重成の墓に参る人たち多く、墓までの道は「木村通り」といわれた。

《河内街道》

かつて江戸時代には枚方道と呼ばれていたようであるが、はっきりとした街道として認識されていたわけではなく、集落同士をつなぐ道が一本となって繋がっていたのが実態だったようだ。

（暗越奈良街道との交点にある道標にも途中の四条畷までしか表示されていない。）

明治22年（1889）の大阪鉄道（関西本線）八尾駅が開業してから河内街道は、「北河内郡枚方町大字伊加賀の国道第2号路線より起こり、中河内郡竜華村大字植松の八尾停車場敷地界に至る」と記されるようになった。

《大坂城築城から大阪夏の陣》

天正11年（1583）・羽柴秀吉大坂城築城。

慶長3年（1598）・秀吉（62歳）伏見城において亡くなる

慶長5年（1600）・関が原の戦い

慶長8年（1603）・徳川家康、征夷大將軍に

慶長10年（1605）・家康、將軍職を秀忠に譲る

慶長19年（1614）・方広寺大仏殿（4月）

大坂冬の陣（10月）和睦（12月20日）

「国家安康」「君臣豊楽」が口実。

東軍20万一籠城一講和一大坂城、裸城に

《大坂夏の陣と若江合戦》

冬の陣は慶長19年（1614）11月中旬から1カ月余りの大坂城龍城の戦であったのに対し、大阪夏の陣は翌年の元和元年（1615）5月6日玉手山・八尾・若江各戦場、5月7日真田山・天王寺各戦場、5月8日大坂城落城のたったの3日間の戦であった。

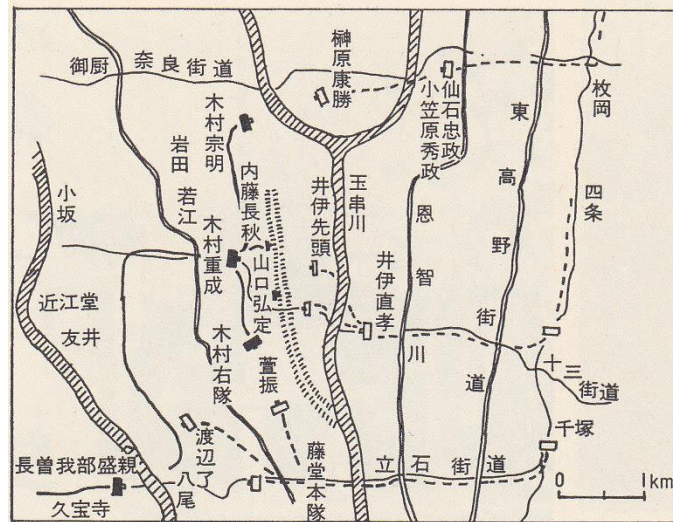
元和元年5月6日（新暦では6月2日）、大坂城の玉造門を進発したのは丑の刻（午前2時）、平野川の大和橋を渡り先頭の提燈一つをたよりに八尾方面に向った。兵数は長曾我部盛親軍が5,200八尾方面に、木村重成軍が4700若江方面に午前5時頃に布陣した。木村重成軍は三隊に分かれて、左翼は重成の叔父木村宗明が岩田村・奈良街道に、右翼は青木七左衛門・長屋平太夫が西郡村に、本隊は木村重成が若江村に備えた。戦場を八尾・若江に選んだのは大御所徳川家康と將軍秀忠が東高野街道を道明寺方面へ南下するのを側面攻撃するためであった。

若江村は南北に細長い微高地上に形成した村で、古代には郡衙がおかれ、中世には若江城が築かれた。木村重成は若江村の南の小高いところを本陣にした。

5月6日朝、河内平野は霖雨であったという。深い靄（もや）がたちこめていた中、東高野街道を南下する第一番隊は藤堂高虎軍、第二番隊は井伊直孝軍であった。朝靄が晴れると八尾・若江方面に蟻のごとくせまってくる西軍を見て驚き、急に方向転換して藤堂軍は本陣を八尾千塚において立石街道を八尾井伊軍は本陣を楽音寺村花岡山（現在大阪経法大の位置）において十三街道を若江へ向った。

午前中の戦いで藤堂部隊先鋒、藤堂良勝隊を壊滅させた。高井田村出身の強弓の飯島三郎右衛門の「長門守殿、すでにあなたは存分に戦われた。兵は疲れており再度戦えば敗北は必至、もう城に戻られよ」と、言う進言に対して、重成は「まだ、家康・秀忠の首級を取っていない」「この程度の勝利はもの数ではない」

八尾若江戦図（日本戦史より）



と大坂城への帰還を拒んだ。一時の休息の後、中小阪まで馬を駆け馬の背に立って大坂城を望見した。（弥栄神社「馬立」跡）

天正11年（1583）秀吉築城の大坂城は五層八階、安土城を凌ぐといわれた天守閣を備えた難攻不落の城であり、政治、経済、軍事、文化の中心、拠点でもあった。木村重成にとって秀頼に近侍し、共に成長した大坂城には特に感慨深いものがあったのであろうか。

重成の最期は、『難波戦記』には新手の井伊掃部直孝軍との戦いで庵原助右衛門朝昌（家老）の十文字槍で打ち倒されて、家臣の安藤長三郎重勝（18歳）がその首を賜ったという。しかし、庵原助右衛門朝昌と槍を合わせたが、勝負がつかず力尽きた重成が、安藤長三郎重勝に、「自分の首級を取って手柄にせよ」という言い伝えもある。（吉田吉富家「若江戦記『大阪軍状記』」）

① 飯嶋三郎右衛門墓

高井田村の出身。幼少より弓矢が得意で成人して、永禄11年（1568）、河内を制圧した織田信長に仕える。後に豊臣秀吉、秀頼に仕え、夏の陣に際して、木村重成の先鋒として若江に出陣し山口重信と槍を交え重傷を負い、家臣高井田七右衛門が背負おい北方5～6町の地に退いたが絶命した。飯嶋三郎右衛門の長男、三吉は殉死を遂げ妻も母も自刃したが、乳母に助けられた次男が成人した後、この地と高井田に父の墳墓を建てたと伝えられている。

飯嶋三郎右衛門が絶命したこの地は沼地で若江村と岩田村を結ぶ「雁戸樋橋」という細い橋があり川が流れていたが、今は道路の下になっている。

② 長沢辻地蔵

この場所は、若江村の東端にあたる長沢辻と呼ばれ、現在は分かりにくくなっているが南北の道が平野の大念仏寺に通じる融通道の一つで、地蔵菩薩立像は高さ109cm、幅76cmを測る花崗岩に舟形の彫りくぼみを作り、像高65cmの立像を半肉彫りし、「康永元年（1342）9月24日 河合辻一結衆等」「奉造立長沢辻堂地蔵菩薩」と刻んでいる。市内では暗峠の笠塔婆について2番目に古く、南北朝の貴重な石仏として東大阪市の文化財に指定されている。※「康永」は、北朝の年号

若江村の西村家文書によると、この地蔵尊は高さ約4mの（若江）堤上にあると記されている。



若江合戦図 彦根城博物館

③ 山口伊豆守重信石塔（若江墓地内）

若江墓地の一角にある。元和元年（1615）5月6日大坂夏の陣若江の戦いで徳川方武将、山口重信は豊臣方の武将木村重成軍と戦い、両将とも討死した。碑の高さ1mの上に丸彫りした亀（「ヒイキ」という空想の生きもの）、その上に高さ2m巾90cm、厚さ50cmの碑が建てられている。篆刻による銘文には若江の戦いの様子が幕府の大学頭（だいがくのかみ）林道春（羅山）の文章、篆刻は石川丈山。碑は、重信の弟、弘隆が正保4年（1647年）33回忌に建立している。玉垣は重信の弟重恒（しげつね）が承応3年（1654）に、花立は弘隆の嫡男重貞（しげさだ）が元禄5年（1692）に、灯籠は家臣山口忠兵衛重成が承応3年にそれぞれ寄進している。

④ 木村重成の墓

大坂夏の陣「若江合戦」は、双方で死者1400名という激しいものであった。その死者の中に豊臣秀頼の小姓、木村長門守重成がいた。木村重成は当年19才ともいわれ美しい若武者であったが、討ち死を覚悟した木村重成の毛髪から「匂い立つお香の薫り」と「切られた兜の忍ぶ緒」に、首実検した徳川家康は、その見事さに言葉を失った、と言われている。

木村重成が戦死した地（木村公園）に150年後、井伊直孝方の安藤長三郎の子孫によって供養塔が建てられた。戦場で一瞬の輝きを残しこの世を去っていった若武者に多くの共感を呼んだ。そのお参りに豊公鼻頂もある大阪の女性を中心として「重成参り」がはやったそうだ。商家の娘さんも「重成公」をお参りすると言えばお許しがでたようで、この辺りが大変にぎわい供養の花を売るお店が何軒も軒を連ねたそうだ。

「河内名所図会」には、今は第二寝屋川になっている小川を挟んで、右隅に木村重成墓を描き、重成に破れた徳川方の山口重信の供養塔（現在若江墓地）を画面の中央に、鬱蒼とした森とあわせて大きく立派に描いている。時の支配者に遠慮してか重成公の墓を貧弱に描いた作者だが、大勢の墓参りする武士や農民・庶民の姿を描き、賑わいぶりを表し、重成の武士としての生き方に敬意を見せている。

当時、重成公の墓参り用の供養花と側の松の葉と湧き水を売る店が並び、特に松の葉は元気になると言うことで定価12文だったそうだ。重成公の供養塔にお参りする人々が多く、山口重信の石塔を支えている「亀」の寂しそうな鳴き声を聞いたとの話が今に残っている。

また、同じ河内名所図会に、木村重成隊を道案内した高井田村出身の弓の名人、飯島三郎右衛門墓を右上に紹介している。



河内名所図会（享和元年・1801年、秋里籬島）

図会を読み解く 街道、川、墓塔の向き（建墓当時の向き）、墓地の高さ、墓参の人々の様子
《重成は炎上する大阪城を見なかった》

重成が5月6日の午前中の藤堂高虎隊先方の藤堂良勝との戦いで勝利した後、昼頃に大和川右岸に立ち、大坂城を望見している。現在弥栄神社（中小阪にあり、小阪駅南へ800m。司馬遼太郎記念館の南側）の敷地にある「馬立」の跡である。

東大阪市の説明文には「炎上する大阪城を見た」と、あるが大坂城は明るる7日の午後5時頃に炎上している。重成は落城する姿を見ていない。討ち死を覚悟していた重成は、馬の背に立ち威風堂々たる大坂城を万感の思いを持って遠くから望んだことであろう。

《木村重成の人となり》

- ・ 生年は不詳。父は地侍木村三郎左衛門か、木村常陸介重茲の養嗣。後、江州の太守、佐々木義郷に養育される。母は、宮内卿局が秀頼の乳母、秀頼の近習。秀頼と「乳兄弟」「幼なじみ」深い信頼関係
- ・ 大坂冬の陣、今福の戦い・佐竹義宣や上杉景勝らの軍勢を破る。
『沈勇の士』 智・仁・勇の三徳を兼ね備えていた若武者。「たとえ矢玉は遁れようとも、運命からは遁れるのは難しい」「自分は若輩ゆえ戦闘の経験が乏しい。どうか戦闘に際しては存分にお引き廻しお頼み申したい」
- ・ 秀頼の四天王は、真田信繁、後藤基次、長曾我部盛親と木村重成

⑤ 十三街道道標

鏡神社の鳥居前の道を南に行くと三叉路の角に道標が二基ある。一基は享和3年（1803）造立。「木綿屋五兵衛」らの名前が刻まれている。もう一基は上部が欠損し「□□原」「□□他力」「□□卫門」「□□本山」と刻まれている。※一基は移転の際に90度角度を間違って設置されている。

⑥ 若江鏡神社（延喜式内社）と雷が落ちない謎

若江鏡神社は、式内社で歴史が古く、若江廃寺と共に建立されたようで、息長足姫命、帯仲彦命、そして

大雷火明神（おおいかづちのほあかりのみこと）を祭神としている。江戸時代には塚本大明神と呼ばれていた。本殿前と拝殿の間に雷の手形石と呼ばれる石がある。『文徳実録』の斉衡元年（854）の4月条に「授河内国大雷火明命従五位下」と記され、当社が従五位下の社格を賜ったことが分かる。本殿は極彩色を施した銅板葺三間柱流造。

元禄11年（1698）奉納の雨乞いに使用された大般若経600巻は市の有形文化財に指定されている。鳥居から本殿までの参道の両側には江戸時代中ごろの灯籠が22基並んでいる。鳥居東の参道入り口両側には、雨乞御礼として享保18年（1733）に三郷が寄進した高さ約3mの灯籠、鳥居を入れて4番目にも明和6年（1769）に三郷が寄進した雨乞御礼の灯籠などがあり、雨乞いに霊験あらたかであったことがわかる。

祭神が大雷火明神ということもあるのか、司馬遼太郎さんが『街道を行く』で紹介されている「河内一の勇壮な祭り」が例年10月10、11日に行われている。

宮入は、岸和田の地車に負けず劣らずの豪快さは最近、とみに人気が出ている。特に地車の屋根に登る狐のような仕草をする大工方、それは祭りの華だ。面相は醜男（しこお）だが、この日のために「イキの良い若衆」が練習を重ねる。

本殿の裏には、「鏡塚」といわれる渡来してきた豪族の後の墓がある。また、本殿の前庭にある『雷神の手形石』は斉衡元年（854）に雷が誤って神前に落ち、神の怒りに触れて天界に帰れなくなった。『若江には二度と落ちない』と約束の手形を神前の石に残し、許されて天に戻ったという伝承にはおおらかでゆったりとした時代の面白さが感じられて愉快だ。

⑦ 蓮城寺・木村重成公霊牌所

日蓮宗、正保元年（1644）焼失。いろいろな宗派の遊行僧が再興をはかるがならず、元禄6年（1693）、蓮性院日相上人が再建した。木村重成の位牌が祀られている。九州の加藤清正の子孫が祀っていたご位牌を、木村重成のゆかりの地、若沈鐘神社に移され祀られていた。（年不詳）霊牌所が建てられた際に蓮城寺に位牌が移された。（霊牌所も九州から移築）

⑧ 若江城跡

若江の町は、古代の河内湖に面し清水の湧く入江の微高地であったようだ。交通の要所でもあり、河内を治めるのに適しており、若江鏡神社を中心にできた町並みを利用し平城だが若江城も築城されている。なお、この若江城には、織田信長が5回訪れている

信長時代の城は当時では最大級。近畿平定の拠点であった。現在の若江幼稚園周辺を中心に東約170m・西215m・南175m・北約190mで、ほぼ方形の平城が河内平野の真ん中に築かれていた。堀りは、素掘りで逆茂木（堀内の防御用の杭列）の打たれた幅約幅15から30m、深さ3.5mの内堀に囲まれた面積約2万㎡の主郭（本丸）を持つ城で瓦葺き、白壁の隅櫓が建っており、外堀まで含めると約42万㎡であった。

若江城は明徳元年（1390）畠山基国が河内国の守護になった頃、守護代遊佐氏の本拠として築かれて以来、織田信長が石山本願寺の戦いに勝利したあと、秀吉が大坂城を築城した天正11年（1583）までの約190年間建っていた。しかし、今も当時の城下町らしい風情を残すところがある。この間の城主にキリシタンであったメシアン池田丹後守の教会があったことをあらわしている「大臼（だいうす＝ゼウス）」が字名（地名）に残っている。当時の表通りといわれていた所に、信行寺とその横には南北朝時代の二幡地藏、そして、美女山薬師寺（巨摩堂）がある。



以上文責 東大阪観光協会
東大阪文化財を学ぶ会
南 光弘

